

# 厚木市史たより 第17号

平成29年11月1日

題字は渡辺華山筆「游相日記」から文字を抽出して作成したため、清音の「たより」としました。

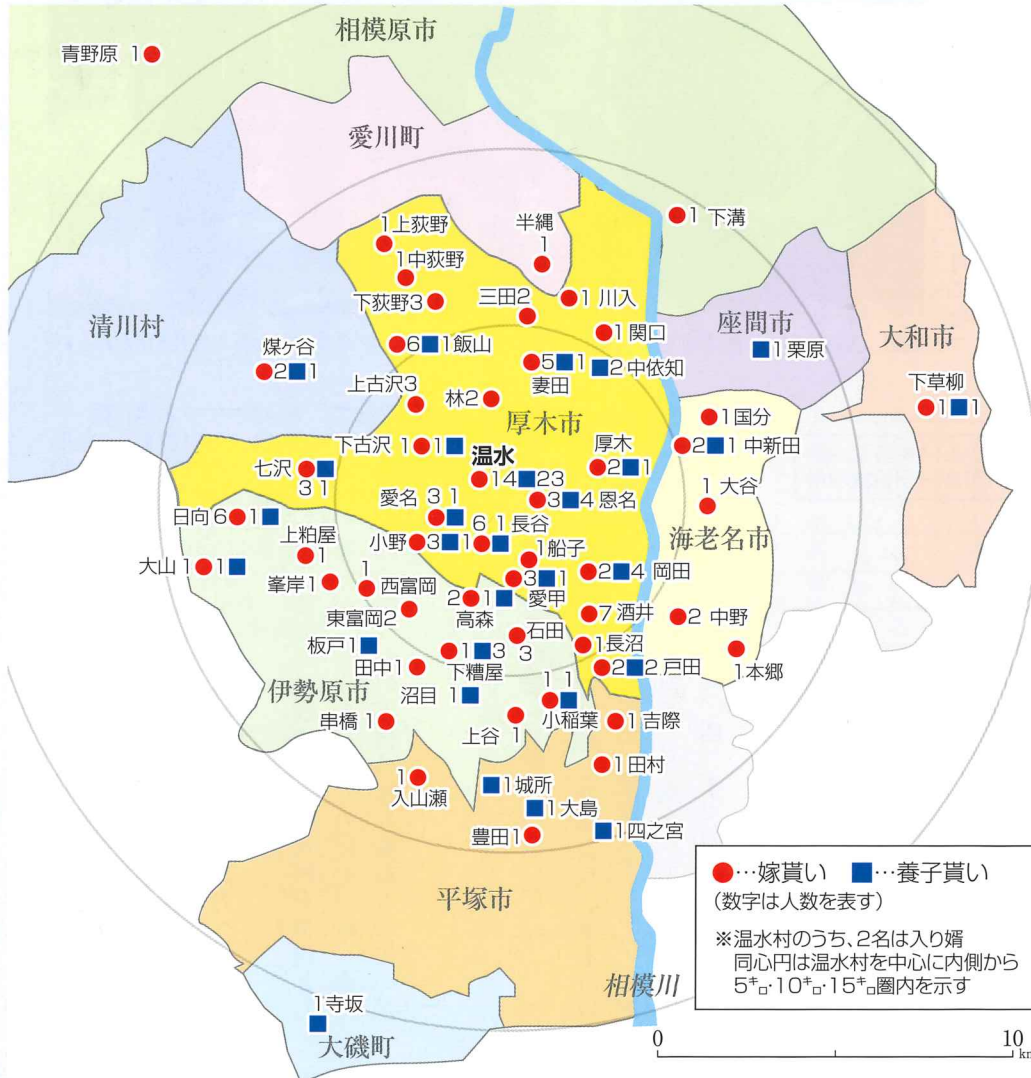


図1 温水村通婚圏分布図

## 『厚木市史』民俗編(2)

### 村の暮らしについて

厚木市史編集委員会委員長 内藤佳康

#### 1 はじめに

『厚木市史』民俗編(2)村の暮らしは平成二十九年三月に刊行された(以下『市史』と略

#### 2 通婚圏について

近世から明治初期の嫁や婿入り(養子貰い)

す)。筆者が執筆担当した「人の一生」から、通婚圏・婚礼時期について紹介したい。詳しくは『市史』を一読されたいが、改めて触れてみたい。

ほどの範囲の村々から貰っていたのであろうか。従来の民俗手法では、話者との聞き取りによる事例の紹介で、記録により村全体で長期の事例報告は極めて少ないのではないか。今回、温水山まき山口克忠家文書から愛甲郡温水村の寛政四年(一七九二)から明治十一年(一八七八)まで凡そ九〇年、八六世帯一七六例の動向を把握することができた(『市史』286頁)。

嫁貰いは一一五例で、温水村の属する愛甲郡、大住郡、高座郡、津久井郡に亘る範囲が通婚圏であることが分かる。この内、愛甲郡から嫁す事例が六四例(五五・七%)を占めている。さらに詳しくみると、村内婚が一四例、次に隣接する長谷村・飯山村がそれぞれ六例、大住郡内からは酒井村七例、日向村六例で、愛甲郡と接している比較的近距离の村々の事例である。さらに相模川を挟む高座郡からの事例もみられる。

次に婿入り(養子貰い)の六一例についてみてみよう。特に目につくのが、同一村内からの事例が二三例(三七・七%)と圧倒的に多い。次に愛甲郡恩名村四例、大住郡岡田村四例と続く。

図1をみて頂きたい。この図は、『市史』286頁「温水村通婚圏一覽」を基に作成したものである。嫁や婿入りは、地図上から読み取ると、半径五キロから一〇キロ圏内ではほぼ収まるのがみてとれる。

温水村は、恩曾川の水を引水し、また一部では湧水を利用しながら稲作が行われてきた村である。植田準備は四月から始まるが、五月初旬の種蒔きを済ませ、田起し、六月中・下旬から七月初旬の苗取り・植田作業となる。植田が済むと田の草取り、畦の草刈り、十月





図2 入家儀礼 (『厚木市史』民俗編(2)所収)背景に雪が見え、冬季に行われた婚礼と思われる。

末から稲刈り・脱穀・乾燥を済ませると十二月になつてしまう。

こうした水田耕作の盛んな温水村では、農業の担い手となる嫁は、同じ環境の田場所の村から貰う傾向が強かったのではあるまいか。

一方、婿入りは特に同一村内で生活し農家慣行や農業形態をよく知る農家の二・三男を貰うことが行われてきたとみてよいだろう。婿入り先の家では、家の財産を引き継ぎ、農業を継承していける身近な人物を見定める必要があったのであろう。また、名主クラスの家は、家の格を重視する婚嫁が行われた。

このように、婚嫁は村内婚を原則としながら、次第に村外へと広がりをもせていったのでは、と推定されよう。

右のように、資料から考えると婚姻圏はほぼ半径一〇キロ以内にとまっております、それ以上遠方への広がりは見られない。

近世から明治初期の婚姻圏を、温水村を事例として紹介してきたが、もう少し多くの村や山村・漁村など農業以外の幾つかの事例の積み重ねも今後の課題であろう。

### 3 婚礼時期について

次に婚礼時期について検討してみよう。厚木市域に残る資料から、婚礼時期を一覧表にまとめた(『市史』288頁)。婚礼時期の判明した安永八年(一七七九)から明治三十七年(一九〇四)までの八六件である。

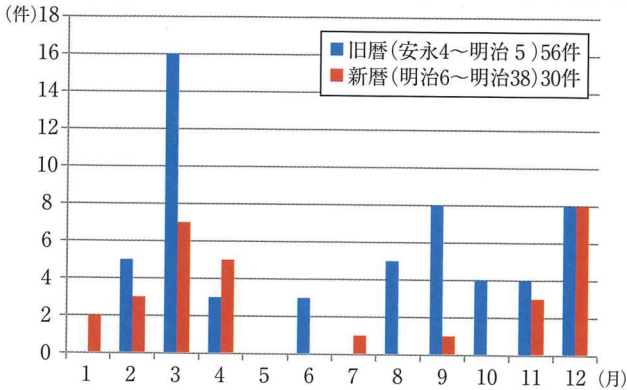


図3 婚礼時期調査

祝儀控帳・婚礼一式諸事控帳などの資料を基に作成した。婚礼時期は旧暦と新暦(明治五年)を区別して検討する必要があるため、棒グラフは別立てとした。旧暦はおよそ新暦の一月後と推定してよいだろう。

資料を基に

作成したのが、図3である。

新暦でみると、婚礼(祝言)の多い月は、十二月(八件)、三月(七件)、四月(五件)の順になる。旧暦では、三月(二六件)九月(八件)、十二月(八件)となる。

少ない時期は、新暦では、五月(零件)、六月(零件)、旧暦では五月(零件)、七月(零件)となる。新暦・旧暦とも五月は全くない。この理由の一つとして考えられるのは、農家にとって植田時期の五月〜七月初旬までは、繁忙期にあたり、祝言を行うことが困難であったと思われる。

新暦でみると、祝言の多い時期は、十一月から四月までが多い。このことは、農業は一年中忙しいが、比較的農作業に余裕のある時期に婚礼が行われたと言えらるだろう(図2)。

婚姻は、家にとっても本人にとっても最も大きな節目となる。聞き取り調査では、採取事例も少なく、近世に遡って究明することは難しい。こうしたことからかつて通婚圏や婚礼時期について、資料に基づいて具体的に示されたことはなく、今回初めて『厚木市史』民俗編(2)の暮らして紹介した。今後ともより多くの資料を収集・分析し、さらに完成度を高めていく必要があるだろう。

### 4 まとめ

以上、通婚圏と婚礼時期について紹介した。このほか、結納金・嫁入り道具・祝言祝い膳料理・祝い品などについても、『厚木市史』民俗編(2)の暮らして紹介することができた。

近世から現在まで続いている行事や、すでに行われなくなっている儀礼も多い。本書を御一読願いたい。



# 講の年次変化からみえるもの

厚木市史編集委員会委員 平本元一

## 1 はじめに

『厚木市史』民俗編(2)村の暮らし(以下『市史』と略す)において、「講集団にみる信仰・伝承」として市内の講の概要を第六章で述べたが、その中で講中又は個人の信仰の発意による紀年銘の明確な石造物の造塔数を編年によりグラフ化し、その推移を示した。

しかし、これは単一の講の確認であったためほかの講との比較ができなかったことから、ここでは庚申講、念仏講、秋葉講、地神講を取り上げ、検討してみることにする。庚申講・念仏講は近世以降最もポピュラーな講として認められるものであり(図1)、秋葉講は代参を伴い、地神講は農作業に係る休息や物忌みに乗じての遊興飲食の寄合の一面がみられる。庚申講については厚木市より北に位置する愛川町、清川村、相模原市の事例とも比較検討してみる。



図1 念仏講 (『厚木市史』民俗編(2)所収)

庶民の日常生活に少なからぬ影響を与えていた講の年次の推移から、社会的なあり方が見えるのかどうかを考えてみる一例としてみたい。もちろん全体把握には講全てについての比較検討が必要なことはいまでもないことである。

## 2 講の発生から展開・終焉

厚木市内において今のところ中世にさかのぼる講の事例や具体的な資料は確認されていない。市内の講に関する事例や資料は近世以降が中心である。

『市史』で紹介した講の内容からは、講が人々の日常生活と深い関わりを有するとともに、家を中心にした家父長、女性、子どもなどが参加していた様子がうかがわれる。

それぞれの講の消長は様々であるが、多くの事例が昭和期に絶えており、それは社会生活や経済活動などの急激な変化に起因する部分が多いためであったと考えられる。

ここでは、講の発生から展開・終焉を、石造塔、道具、文書等の資料数を一括し(呼称は〇〇講と称する)、一〇年ごとの年次で表記したグラフ(図2)から検討してみる。

庚申講は寛永(九年一六三二・林大坂例)以降元禄(正徳期一六八八～一七一五)まで増加傾向にあり、享保期(一七一六～三五)にピークとなる。その後増減を繰り返して天保期(一八三〇～四三)に大きく減少、直後の嘉永(万延期一八四八～六〇)に増加、以降明治末まで減少し、大正末以降に新たな例はみられなくなる。

念仏講は寛文(五年一六六五下川入例)から元禄にかけて増加し、享保期にピークとなり以後減じるが、宝暦期(一七五一～六三)に再び増加した後、増減を繰り返して安政(一八五四～五九)以降は減少し、明治末には新たな例はみられなくなる。

秋葉講は安永(六年一七七七養徳寺例)からみられるが、以降大きな増減がなく続き、大正期(一九一三～二五)には新たな例はみられなくなる。

地神講は寛政二年(一七九〇妻田、「宗碩日記」

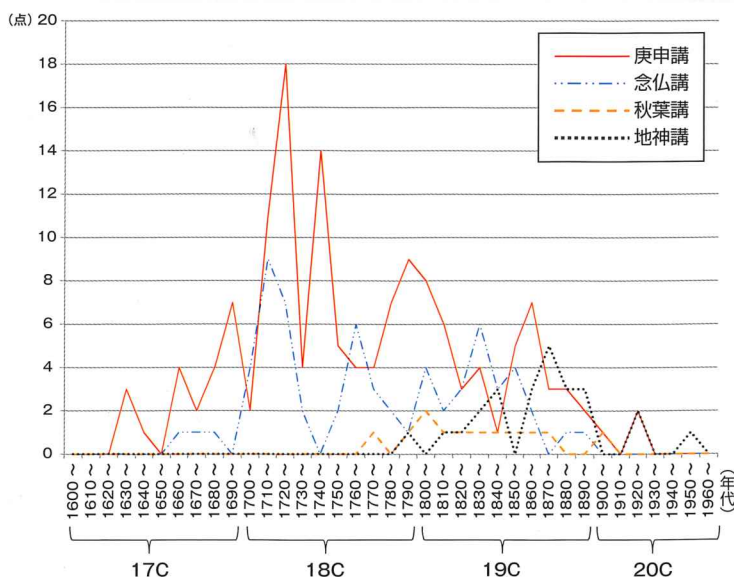


図2 講の年次変化グラフ

記載)の初見以降増加し明治初期にピークを迎える。その後減少し、昭和四十年代以降新規のもののみはみられなくなる。

## 3 近隣の動向

次に、庚申講について近隣地域と比較したものが図3のグラフである。相模原市域での庚申塔の最も古い例が延宝三年(一六七五)で、以降増加傾向を示し宝暦期にピークとなり、その後減じるものの再び享和(文化期一八〇一～一七)に増加後増減を繰り返して明治中期に最大のピーク(養蚕信仰による個人造塔)を迎え明治末までに急激に減少する。

愛川町域では正保五年(一六四八)の懸仏が最も古く、正徳(享保期一七一三～三五)にピークが



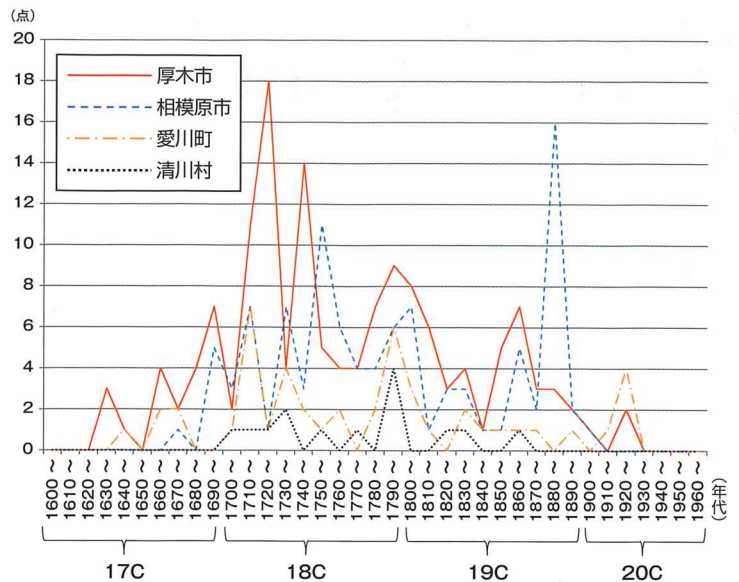


図3 庚申講の市町村別年次変化グラフ

ありその後増減を経て寛政期（一七八九〜一八〇〇）に再び増大し、以降減じながら大正期に最後のピークがあり昭和初年でみられなくなる。

清川村域では元禄十六年（一七〇三）以降寛政期に最も増大するものの明治初年にはみられなくなる。

#### 4 グラフ変化の傾向

近隣の様子を含めいくつかの講の時間的な変化をみたが、凡そ次のように集約できるようである。

一 庚申講、念仏講のグラフにみる変化は比較的相似的で、十七世紀前半までにみえ始め、十八世紀前半、十八世紀末から十九世紀初、十九世紀中頃に三つのピークが認められる。

二 秋葉講・地神講は庚申講、念仏講より後発であり、

秋葉講が十八世紀後半から、地神講がさらに遅れて十八世紀末以降である。地神講は十九世紀後半にピークがあり、二十世紀中頃まで継続する。

三 庚申講の近隣との比較では、三つのピークの配置に一部相似的な変化を認めることもできる。厚木市域にみられる三ピーク後に近隣のピークがやってくる様子がみてとれる。

#### 5 まとめ

庚申講、念仏講、秋葉講、地神講のそれぞれの造塔や関係資料の数量の変化は以上のとおりであったが、庚申講、念仏講はともに最初のピークが享保期を中心とする十八世紀前半に訪れる。そしてこれは近世、近代を通して最も高い数値を示すもので、これ以降にこのピークを超える数値はみられず、増減を繰り返しながら減少する。こうした状況は多少の時間差を伴うものの近隣においても類似の傾向が認められる。特に庚申講は六〇年に一度巡ってくる庚申の年にピークが重なる様子が認められる。

また、複数のピークは、幕府の享保・寛政・天保の改革期あるいはそれに近い年代ともいえる。それぞれの改革はともに百姓町人には厳しいものであったが、講はそうした人々の情報交換の寄合の場としても機能していたことも考えられる。しかし、講組織の全体的な減衰傾向の中で、ほかの新たな講への較替えというような状況をはらんでいたのかもしれない。秋葉講、地神講の初発は十八世紀後半以降であり明らかに庚申講、念仏講に遅れているが、庚申講からの移行の受け皿の一部となったことも考えられる。庚申講は貴族や武士から庶民の信仰へと変化した時点で飲食歓談の場となり、無尽なども行われ（温水浅間山例）娯楽的な様相を示すようになっていたが、秋葉講は代参を伴い、地神講では無尽はもち

ろん花札や博打も行われ（船子・中荻野例）、より娯楽性・遊興性に富んだものであったといえよう。

近世初期以降原始的な民間信仰を中心とする庚申講、念仏講などの土着の講が次第に代参講や遊興的な講により浸食され、減少していったとみることができると、新たな講の組織加入を推進したのは御師や修験によるところが大きかったことも考えられる。

以上のように講組織の変化の比較によりその要因を考える一例を示したが、より多くの講の成立と消長の事例を集積分析することにより、近世以降の庶民生活の一端を明らかにすることが可能となるであろう。

〔参考文献〕

- 『愛川町文化財調査報告書』第2集〜4集  
愛川町教育委員会（一九六四・一九六五・一九六六年）
- 『愛川町文化財調査報告書』第6・7集  
愛川町教育委員会（一九七〇・一九七一年）
- 『相模原市史』文化遺産編 相模原市（二〇一五年）



新刊

『厚木市史』民俗編(2)村の暮らし

◆価格 5500円 642頁 A5判  
◆厚木市役所1階市政情報コーナー  
厚木市郷土資料館で販売しています。

厚木市史たより 第17号

平成29年11月1日発行  
編集 厚木市教育委員会文化財保護課  
発行 厚木市  
住所 神奈川県厚木市中町三二一七  
電話 〇四六二二三五二〇六〇  
FAX 〇四六二二三三〇〇八六

「厚木市史たより」は厚木市ホームページにも掲載しています。